

サイレンの物語

サイレン (Seiren) はふつうラテン語に従って Siren と書く、ギリシア神話では人首鳥身の女怪物で、海辺の岩の上で歌を歌い、航海者を惑乱溺死させる。最も有名な物語はギリシア史詩の『オデッセイア』 (Odusseia) ¹の中の、第十二巻で神女キルケー (Kirke ラテン語では Circe と書く) がオディシウスの航海の危難を予告して、

“第一にあなたはサイレンに会うはずです。彼女は遇った全ての人間たちを蠱惑します。もし誰かが不注意に彼女たちに近づき、サイレンの歌声を聞いたなら、もう家に帰ってその妻や子どもに会うことはできません。彼らも彼が帰ってくるのを見ることはありません。サイレンは彼を蠱惑するのに、彼女らの澄み切った歌声を使います。草野の間にうずくまって、周囲は死人の白骨の山です。骨の傍に皮がまさに朽ちつつあります。

“あなたは船を走らせて通り過ぎるのに、蜜を揉んだ蠟で、仲間の耳を塞ぎ、歌声を聞かせないようにしなさい。ただあなたが聞こうと思うならば、彼らにあなたを帆柱に括り付け、縄で強く縛り付けさせれば、あなたは愉快地サイレンの歌を聴くことができるでしょう。もしあなたが仲間に縛りを解くよう求めたら、もっと何重にも縛るようにさせなさい。

“我々の船は (以下オディシウスの自述) まもなくサイレン二人の島に着こうとしていた。一陣の和らいだ風が船を走らせていたからである。突如その風が止んだ。そして無風の静寂となり、神が波浪を眠らせたのだ。……船は陸地に近づき、呼び声が聞こえるようになった時、我々は急いで逃げた。サイレンたちはすでに前から来た船を見つけて、澄み切った歌を歌い始めた。

“‘さあ、有名なオディシウス、さあ、あなたはギリシアの光栄、ここに来て船を泊め、わたしたち二人の歌声をお聴きなさい。凡そ黒船に乗ってここへ来た人は、誰一人としてわたしたちの口から蜜のような甘く美しい声を聴かなかった者はありませんよ。喜び楽しみを享受して、たくさん智慧を手にして帰るのです。わたしたちは全てを知っていますから、すべては神意がトロヤで産んだ苦痛によって、わたしたちは豊かな大地に来たるべき事柄を知るのです。’

“彼女たちは美しい声でそう言う。わしは心で聴きたく思い、仲間に命じてわしの縛りを解くように言い、わしは眉にしわを寄せて頷いて合図したが、彼らは力の限り槳を漕ぎ、前に向かって進んだ……”

こうして、彼らはこの危難を逃れた。後代の陶器画に描かれたところでは、一人のサイレンは失敗したために海に身を投げて死んでいる。ある人は彼女たちは水神アケロース (Acheloos) と文芸の女神美音 (Kalliope) の娘で、もともとやはり神女であり、後に地母 (Demeter 新説によれば穀物神と解すべし) が、彼女たちが冥王にさらわれた自分の娘を探そうとしないので、彼女らを鳥身に変えたのだと言う。又一説では彼女たちは地母の娘を哀悼して、どこにでも彼女を探しに行けるように、天に羽を生やしてくれと祈ったのだとも言う。

これはサイレンに関するふつうの伝説である。しかし彼女の来源がどのようなものか、われわれは少し検討を加えることができる。ハリスン女史 (J. Harrison) の研究によって、古代美術および宗教思想に基づいて考察するなら、サイレンはスフィンクス (Sphinx) などと同じで、もと

は一種の妖怪（Ker）であったのである。最初はただ死人の魂であったのが、想像で人首鳥身となる。しかし神人同形の傾向が勢力を占めると、魂も化して人形^{ひとがた}となり、ただ残った一揃いの翼が旧時の痕跡を示すことになり、鳥身の女人がかくて変じて死の凶鬼、魂を収め命を早める使者となったのがすなわちサイレンである。本来はこうした地下の妖怪はすべて生きた人間を攫い、未来を予知できるといった特色を持っている。肉攫鬼女（Harpuiai 英語ではふつう Harpy と書く）はとても明瞭で言うまでもない。スフィンクスは未来の予知に重点があるけれども、やはり“生肉を食う者”で、サイレンも人を攫うが、ただ蠱惑を用いるだけである。“ホーマー”は彼女たちの蠱惑の力を智慧の餌の面に移し、決して感覚だけを専らにするのではない。これも詩人の改修で、実際には皆が皆そうではない。石刻の残片に郷人の午睡が描かれており、鳥足有翼の女がその身体の上に坐って、彼にさまざまな妖夢を見させているが、これこそサイレンの本相である。史詩では航海者が、“無風の静寂”の中でサイレンに会うと言っているのは、極めてよい傍証である。ギリシアのような所では、日中の太陽はとても恐ろしく、午睡はとても危険で、放蕩の妖夢のみならず、日射病さえ起こすかもしれない。これはみなサイレンの悪戯である。だから彼女たちは実に災害死滅の主宰者なのであり、多く色情による誘惑を用いる。史詩においては彼女をさらに美化し、又彼女をエーゲ海の島に移した。後世彼女たちは水神と文芸の女神が生んだものとするのは、つまりここから進化してできたものである。ユーリピデス（Euripides）は悲劇『ヘレネ』（Helene）でヘレネは悲痛と苦しみの中でサイレンたちを呼び、次のように呼びかける。

“翼を持つ女たち、処女たち、大地の娘たちよ！”

彼女の本原が地下の妖怪であり、魂の変相であったことが分かる。しかしサイレンと海の関係はここからもっと密接になり、ギリシアの六世紀後の伝説では、“サイレンは海女であり、彼女たちの美色と艶なる歌によって航海者を誘惑する。頭から臍までは人形で、少女のようだが、以下は魚尾で鱗がある”と云う。すでに彼女たちを人魚と混同しており、今のギリシアの郷民はまだそう信じているという。サイレンは恐るべき怪物で、古人は怪物の形象を画に刻んで魔除けのお守りとし、竈の焚き口の上部に“泰山石敢当”のようなゴルゴン（Gorgon）の首を型押ししたり、墓の上にサイレンあるいはスフィンクスを並べて邪鬼を避けたりした。後人は墳墓と唱歌の連想から、次第にサイレンを挽歌を唱う哭き女として、墓碑に彼女たちが髪を摘み哭き吟う様子を刻んだ。そうして彼女たちの色情と危険な分子は皆失われ、ローマの詩人がサイレンは地母の娘が攫われたのを哀悼したために鳥身になったのだと言うのは、おそらくここから生まれた伝説だろう。現代の西欧では、サイレンという言葉は借用されて蠱惑的な女性を指す。それは彼女の最も新しい生命となった。

本篇の材料は、各神話集のほか、ハリスン女史の『ギリシア宗教研究導言』およびロースンの『現代ギリシアの民俗と古宗教』ⁱⁱを主とした。 民国十三年九月二十八日。

※初出：1924年10月5日『晨报・文學旬刊』

i 『オデュッセイア』 岩波文庫松平千秋訳参照。

ii ロースンの『現代ギリシアの民俗と古宗教』 J.C.Lawson: Modern Greek Folklore and Ancient Greek Religion. A Study in Survivals.1910.